

住宅設計論におけるアナロジー表現を用いた空間言説の意味内容と構築手法

Meaning and Architectural Composition of Discourse with Analogical Words

in Housing Design Theories by Contemporary Japanese Architect

奥山研究室 15M17245 根本 昌汰 (NEMOTO, Shota)

1. 序

1-1. 背景と目的 アナロジーを用いた思考は異なる事物を類似性から推測するものとして一般的に多くの創作に寄与してきた。建築家も設計論において「森のような空間」のように非日常的な住空間のイメージ¹⁾を表現することがある。そのようなアナロジー表現²⁾を用いた空間言説³⁾からは、いかなる対象を参照し、いかなるイメージを引き出しているかという意味内容だけでなく、それを具体的な建築要素の組合せによってどのように実現するかという空間の構築手法も読み取れる。この意味内容と構築手法の関係には、建築家個人を超えて、人々が無意識に共有する住空間のイメージの典型が現れていると考えられる。そこで本研究では、現代日本の建築家の住宅設計論におけるアナロジー表現を用いた空間言説から、その意味内容と構築手法の関係を検討することで、建築家の思考する非日常的な住空間のイメージの型とその思考の広がり明らかにすることを目的とする。

2. アナロジー表現を用いた空間言説の意味内容

2-1. 参照対象の分類 2章では、分析例(図1)のように、アナロジーとして用いられる事柄の参照対象を抽出し、それらの内容からいくつかのまとまりに分類、整理した(図2)。その結果、参照対象は自然界に存在するもの(〔自然物〕)と、人間が生みだすもの(〔人工物〕)、どちらにも該当しないもの(〔その他〕)に分類した。全体のほとんどを占める〔自然物〕と〔人工物〕の割合を比較すると〔自然物〕が若干多くみられた(54:50)。さらに、参照対象をそのスケールの違いに着目し[風景スケール][人の空間スケール][物スケール][スケール

無]の4つで捉えた。[人の空間スケール]は、参照対象が住空間と同様のスケールと言え、人がその対象の空間を体験できる具体的なイメージをもつものであり、全体の過半数の割合を占めた(59/111)。一方で、住空間のスケールとは異なるものもみられた(52/111)。[風景スケール]は、「森」や「街」のように人が体験できる空間が集積して、一つのまとまりとしてのイメージをもつものである(30/111)。[物スケール]は「巣穴」や「衣服」のように住空間よりも小さい物のイメージをもつ出すものである(15/111)。[スケール無]は結晶や霧氷など具体的な大きさをもたないものである(7/111)。以上より、建築家は住空間と同様のスケールかどうかにかかわらず、多様な対象から空間のイメージを引き出して、住空間に投影しているといえる。

2-2. 周辺環境からの着想の有無 参照対象には、「美しい森であった。森の空間に身体を浮かべようと、まず考えた。」(no.38)のように、周辺環境から着想を得たものと、周辺環境とは無関係に空間のイメージが説明されるものがみられた。これらは建築家の類推的思考の飛躍の有無を示すものであるとして、周辺環境からの着想(以下、周辺着想)の有無として検討した(図3)。その結果、敷地の周辺環境とは無関係にイメージを思い浮かべているものが全体の7割強を占めた(81/111)。

2-3. 着目イメージの分類 建築家が参照対象のどのような側面に着目し、空間のイメージとして引き出しているかを着目イメージとして抽出・検討し、その内容を【領域的イメージ】【体験的イメージ】【機構的イメージ】の3つに大別した(図4)。具体的には、【領域的イメージ】は、

No.10 JT8810 PLATFORM 妹島和世		類推空間：駅のプラットフォームのような通過していくスペース	
のびやかな週末の生活を送る住宅として、人々の動きが止まり落ち着ける包まれたスペースと、人が動いたり止まったり、現れたり消えたりというような、駅のプラットフォームのような通過していくスペースを作ろうと考えた。・・・そういう二つのスペースを確保するために、配置、架構のスタディが繰り返された。その結果、鉄骨の柱から吊られた浮いた状態のカヴァーと、地形として扱われるRCの箱が選択され、地形の上にカヴァーが覆いかぶさるような構成が決定された。・・・カヴァーのしたには、建築と家具の中間のスケールをもつものがいくつか置かれ、流れる内部において、ある程度の行為のきっかけを作ろうと試みている。			
参照対象		周辺環境から着想	
駅のプラットフォーム		なし	
フォーム		着目イメージ	
〔人工物〕		人が運動している状態	
[人の空間スケール]		→【体験的イメージ】	
→建造物			
		建築要素の組合せ	
		屋根+ マス +家具	
		Rf + Ms + Fu*	
		空間の限定性	
		覆い	
		建築要素の配置操作	
		ランダム	

図1 分析例

「外敵や自然の脅威から人の生活をしっかりと守ってくれ」(no.102)のように、参照対象がもつ領域的な側面に着目するものである。【体験的イメージ】は、「心地よい陽射しと木陰」(no.81)のように、参照対象がもつ人の感覚や活動を伴う体験的な側面に着目するものである。【機構的イメージ】は、「秩序と無秩序がほどよくバランスして展開する街路空間」(no.14)のように参照対象がもつ、何かと他の何かとの繋がりやその働きなどの機構的な側面に着目するものである。これらの着目イメージの内、【体験的イメージ】が全体の6割弱(71/121)を占めた。

2-4. 参照対象と周辺着想および着目イメージとの関係

本節では、参照対象と着目イメージ及び周辺着想の有無の内訳(図2内)を検討し、アナロジーとして用いられる事柄の特性を捉える。【体験的イメージ】は〔自然物〕〔人工物〕にかかわらず同様の割合を示したが(37/63, 30/55)、【領域的イメージ】は〔自然物〕で(16/63)、【機構的イメージ】は〔人工物〕での割合の方が多くみられた(20/55)。これは、空間体験が類推的思考の基本的な発想の源であり、自然環境の中で人が親密に感じる領域を発見するようなイメージと、人によって作り出されたものの仕組みによるイメージが着目される傾向にあると考えられる。次に、スケールの異なる類似した対象で比較すると、「森」は周辺環境から着想してイメージを引き出しているものが多い(9:5)一方で、「木」は周辺環境とは無関係にイメージを引き出しているものが多くみられた(11:2)。これより、森は豊かな敷地に広がる環境としてのイメージが着目され、木はそのものがもつ対象としてのイメージが着目される傾向があると考えられる。「空地・道」は周辺環境から着想してイメージを引き出しているものが多い(5:2)一方で、「都市」は周辺とは無関係にイメージを引き出しているものが多くみられた(6:8)。これより、都市は全体を組織するシステムのイメージが着目され、道は街と地続きな、楽しく親密な場としてイメージされていると考えられる。【領域的イメージ】は〔自然物〕では「洞窟」が、〔人工物〕では「建造物」が特に参照されていた。

また、参照対象のスケールにおける周辺着想なしの割合を比較すると〔人の空間スケール〕が半数以上みられた(48/88)。周辺環境とは無関係に着想されている対象は、〔自然物〕では「木」「岩場」が、〔人工物〕では「建造物」「道具」がみられ、これらは周辺環境に関わらず飛躍的に着想することができる強度をもつ対象であると



図2 参照対象の分類

周辺着想あり (30)★ 敷地の周辺環境からイメージを 思い浮かべているもの	周辺着想なし (81)☆ 敷地の周辺環境とは無関係にイメージを 思い浮かべているもの
ex)38. JT0308 森 / 床_隈研吾 美しい森であった。森の空間に身体を浮かべようと、まず考えた。そうすれば樹の湿った足元ではなく、樹木の中程、葉が美しく降り、風と木の葉が会い囁きあう場所に身を置くことができる。	ex)68. JT0907M HOUSE_駒田剛司+駒田由香 「森」のような場所をつくりたいと思った。・・・「M HOUSE」は板橋区内の都営線駅からほど近く、駅前の通りから一筋入った住宅地に建つ。

図3 周辺環境からの着想の有無

【領域的イメージ】(22)◆ 参照対象がもつ領域や境界をイメージするもの ex)102.JT1612 五十鈴川の家_横内敏人 洞穴の空間とは・・・閉鎖的で暗いが、外敵や自然の脅威から人の生活をしっかりと守ってくれ、冬と夜を過ごすのに適した空間である。	
【体験的イメージ】(70)● 参照対象を人が体験する様子をイメージするもの ex)81.JT1212 森のすみか_前田圭介 森の中の心地よい陽射しと木陰のような、自然の天候に合わせた家が住まいの空間になる。そんな領域が規定されない一森のすみかとなることを期待している。	
【機構的イメージ】(33)■ 参照対象がもつ働きや組織をイメージするもの ex)14.JT8911 外房の家_濱口オサミ 階段を昇り降りしながら出くわす路地やカンボ(小さな広場)や切り取られた遠景など。それらが地形に柔軟に対応しながら、秩序と無秩序がほどよくバランスして展開する街路空間。	

図4 着目イメージの内容

いえる。一方で、[風景スケール]は周辺環境から着想されるものが他より多くみられ(14/29)、一方で[物スケール]は周辺環境に無関係に着想されるものがほとんどを占めた(15/17)。

3. アナロジー表現を用いた空間言説の構築手法

3-1. 建築要素の分類 3章では、参照対象から引き出した空間のイメージを、具体的な建築要素によってどのように実現しているかについて検討する。建築要素はマスやヴォリュームといった立体的な要素、床や壁など面的な要素、柱や梁など線的な要素に大別した。その他にも家具や階段などがみられた(図5)。

3-2. 空間の限定性と配置操作からの分類 前節で抜き出した建築要素の組合せの中には空間の限定性が強い要素によって空間の性格を創出するものがあつた。まず、その空間の限定性に着目し、特徴的な建築要素の組合せから6つの型に分類した(図6)。《室》は立体的な空間の広がりや空間配列を前提とするもの、または、覆いと複数の壁によって囲まれた空間が構築されているものである。《覆い+床》は覆いと床を組み合わせることで空間を限定しているものである。《覆い》は屋根や天井など空間を包み込む覆いによって空間を限定しているものである。《床》は大地と切り離された床によって空間を限定しているものである。また、限定性を持たない要素の組合せを《組合せのみ》と捉えた。《室》と《組合せのみ》は資料全体の中で同様に大きな割合を占めた(40/111, 32/111)。

次に、建築要素の場の性格を構築する配置操作に着目し、3つに分類をした(図7)。〈単一〉は単一の建築要素を配置するものである(7/111)。〈規則的〉は建築要素を幾何学的な規則によって配置するものである(30/111)。

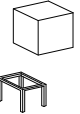
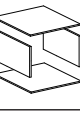
立体 76		殻 Sh	覆いと壁のひとまとまりの連続面	12
		ヴォリューム Vo	立体的な空間のひろがり	23
		マス Ms	表面と中身を伴う密実な量塊	15
		架構 Fr	線材が立体的に組み合わされたもの	7
面 96		覆い Rf	空間の上方を規定する面材	35
		壁 W	垂直な面材	28
		床 Fl	歩行のための面材	33
線 14		梁 B	水平な線材	3
		柱 P	垂直な線材	13
その他 86		開口部 O	面材に開けられた開口部	57
		移動装置 Mo	階段や橋などの移動のための装置	16
		家具・植栽 Fu	配置された家具・植栽	13

図5 建築要素の分類

図註) 単種で複数の要素が抽出できる場合は*を追記した

《室》		立体的な空間の広がりや空間配列または覆い、壁、床で囲まれた空間 ex)30. 16mmの鉄板12枚で花びらにあらたな外観を形成し、 ⇒Sh	40
		覆いと床によって空間を限定しているもの ex)38. 床は地面からは鉄の柱によって「下から」サポートされ、天井は鉄骨構造に ⇒Rf+Flによって「上から」吊られる。	6
《覆い+床》			
《覆い》		空間を包み込む覆いによって空間を限定しているもの ex)92. すべての風景を見通せる空き地であった場所が「屋根」によって空間化され、 ⇒Rf	22
		大地と切り離された床によって空間を限定しているもの ex)24. 木の柱と床という「もの」を用いて、その配置のみによって「カタチ」を超えた「場」としてつくる ⇒Fl	11
《床》			
《組合せのみ》		空間を限定する要素を持っていないもの ex)61. さまざまな「間」、一辺が9m四方の床と、12m四方の勾配屋根の間を結ぶ「柱」同士の間だけでつくれる。 ⇒P*	32

図6 空間の限定性の分類

〈ランダム〉は建築要素を自由に配置するものである(38/111)。配置操作がみられず、空間を限定する要素のみの組合せもみられた(36/111)。さらに、空間の限定性と建築要素の配置操作の対応関係について検討したところ(図8)、〈規則的〉と〈限定のみ〉では《室》が、〈ランダム〉では《組合せのみ》が一番多くみられた。

4. 非日常的な住空間の型

本章では、2章で検討した参照対象及び着目イメージによる空間言説の意味内容と3章で整理した構築手法との関係を検討し、その典型を捉え、非日常的な住空間のイメージの型を位置付ける(図9)。

参照対象の各スケールに対して、空間の限定性による分類の割合を比較すると[人の空間スケール]では《室》《覆い》《組合せのみ》が多くみられ(19/60, 14/60, 17/60)、それぞれ参照対象によるまとまりが見い出せることがわかった。[風景スケール]は《組合せのみ》が多くみられる(13/30)、一方で、[物スケール]は《室》が多くみられた(10/15)。これより、住空間と同様なスケールをもつ対象を参照する場合、イメージを具体的な建築要素に置き換えて思考していると考えられる。住空間より大きなスケールの対象を参照する場合、空間を限定せず、外部へ拡張していくような思考をし、住空間より小さな参照対象の場合、イメージを抽象的に空間全体として置き換えて要素の組合せを思考していると考えられる。

さらに、具体的な対象について詳しくみた結果、建築家が類推的に思考する非日常的な住空間のイメージは、『森』『洞窟』『船』『木の上』『木の下』『道』の6つの典型として位置付けることができた。『森』は森の中の居心地のよさを体験するイメージをもち、それを柱や壁の垂直

〈単一〉	単一の建築要素を配置するもの	7
	ex)16. 寝室であるガラスの箱が、その上から差し込み柔らかい光に優しく包まれて、空間の中に浮遊して見える。 ⇒Ms	
〈規則的〉	建築要素を幾何学的な規則によって配置するもの	30
	ex)88. 三角形の壁が浮遊して連なる風景がつくられている。 ⇒W*	
〈ランダム〉	建築要素を自由に配置するもの	38
	ex)95. そのクリの木程度(4畳半)の小さな箱を、ほどよい距離感をもって点にさせていった。 ⇒Ms*	

図7 配置操作の分類						
配置	限定性	〈室〉 (40)	〈覆い+床〉 (6)	〈覆い〉 (22)	〈床〉 (11)	〈組合せのみ〉 (32)
〈単一〉 (7)		0	0	5	1	1
〈規則的〉 (30)		12	2	6	4	6
〈ランダム〉 (38)		7	2	1	3	25
〈限定のみ〉 (36)		21	2	10	3	0

図8 限定性と配置操作の関係

材のランダムな配置に投影するものである(5/10)。『洞窟』は、人を外敵から守るという領域のイメージを、一体的な連続面に投影するものである(8/10)。『船』は、雑多な風景を切り捨てて水面に漂う感覚を楽しむというイメージを覆いと開口部に投影するものである(5/7)。「木」には二つの性格がみられた。『木の下』は、木の枝が伸びている様子を覆いとして捉え、木の下を歩き回る活動的なイメージを覆いに投影するものである(5/13)。『木の上』は、木の上の場が有機的に関係づけられるイメージを限定しない複数の床のランダムな配置に投影するものである(4/15)。『道』は、『床』と『組み合わせのみ』にまとまりが見られ(6/14, 7/14)、街と地続きな場として人の多様な振る舞いのイメージが、前者は床と階段などによる一続きな面に、後者は複数の床やマスなどの部分的な建築要素のランダムな配置に投影されている。

5. 結

以上、住宅設計論におけるアナロジー表現を用いた空間言説から、参照対象および着目イメージと建築要素の組合せを抽出し、空間言説の意味内容と構築手法の関係を検討をした。その結果、建築家個人を超えて、人々が共有する非日常的な住空間のイメージの典型として『森』『洞窟』『船』『木の上』『木の下』『道』の6つの典型をみいだすことができた。また、この典型には、人々がどのような空間に居場所を見つけて生活をしたいかという想像力と、どのように自らの空間をつくるかという創造的な思考が現れていると考えられる。

註 1) 住むための最低限の機能を担い、安全な生活を送るための日常的な住空間を前提として、デジャブのように、日常生活と異なる意味を無意識に受けとることをここでは非日常的な住空間のイメージと呼ぶ。

註 2) アナロジーとは日本語で「類推」を意味し、ある状況を別の状況に置き換えて理解することを可能にするものとされる。「○○のような」、「○○をイメージした」、「○○らしい」といった内容もしくは文脈から同等の内容が読み取れる箇所に着目している。

註 3) 新建築又は住宅特集、建築文化、JAに掲載されている住宅の作品解説文を資料として、109 資料を対象に分析を行った。建築空間の実体をどのように思考し、構想しているかということに関する建築家の言説を「空間言説」と呼んでいる。空間と直接表現しなくとも、場や領域といった空間と読み替え可能なものなど、空間に関すると思われる内容を含む言説を資料としている。

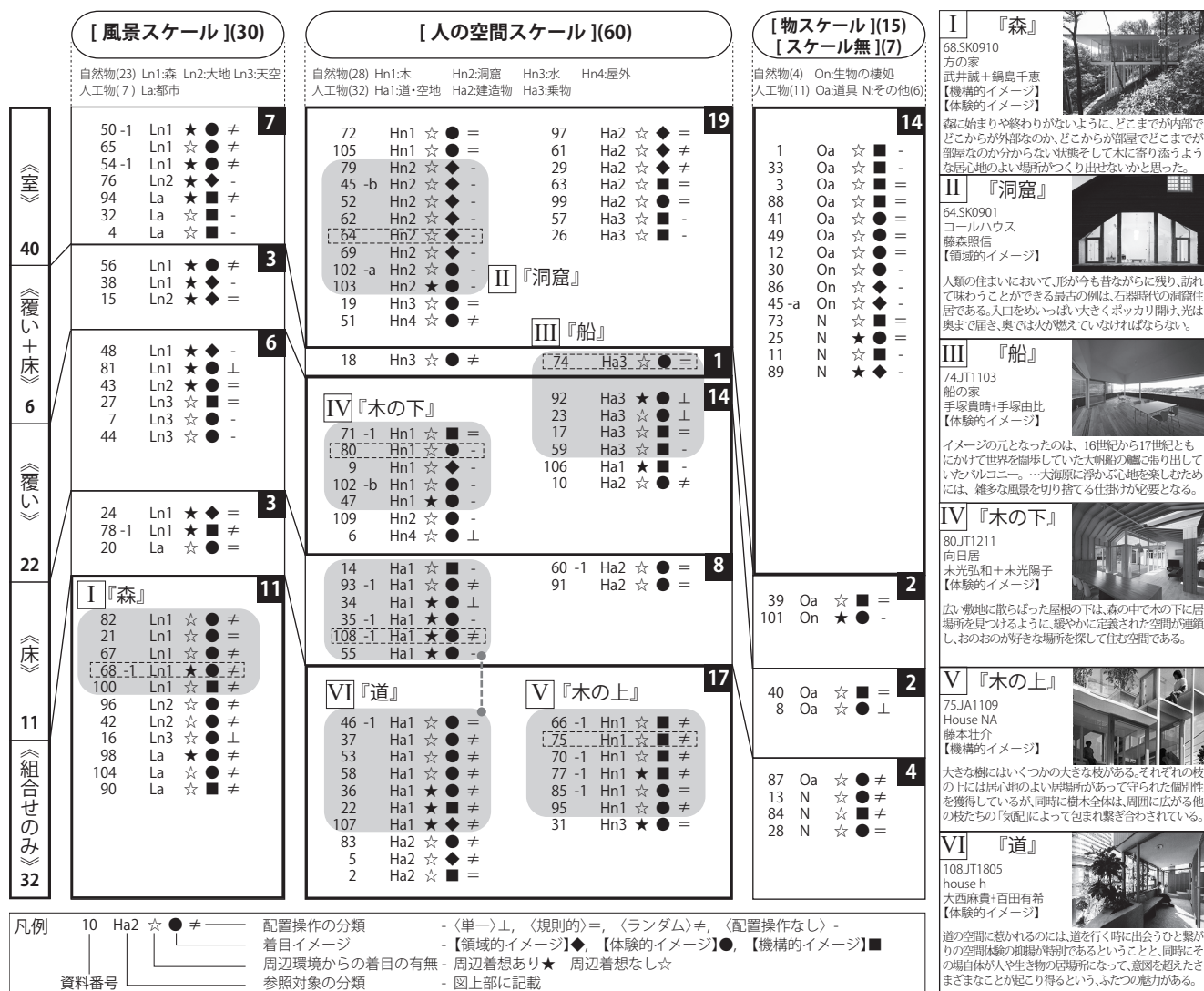


図9 参照対象および着目イメージと建築要素の組合せの関係